

12月19日(金)
16:00~17:00
V号館5209教室

(いつもと教室が違いますのでご注意ください)

「空間明示モデルで 動物個体群のパラメータを推定し、 保全管理策を評価する」

藤田剛 Go FUJITA

東京大学農学生命科学研究科生物多様性研究室

要旨

生物の分布は必ずしも安定しておらず、急速に広がったり、逆に縮小分断化する例が多く見られます。とくに大規模な環境改変が進む現在は、分布が数十年と いった短期間で大きく変化する例が多数知られています。その結果、シカやカワウのように分布拡大している個体群では、被害対策のために個体数管理の必要が生じ、逆にサシバやコアジサシのように分布の分断縮小が生じている個体群では、保全策が必要になったりしています。しかし、このような分布が変化している個体群の分布動態を予測することは難しいとされてきました。繁殖率や生存率の場所による違いや、それら場所間の移動分散に関する情報が必要だからです。とくに分散率を直接観察から推定することは困難で、モデル構築の大きな障害になってきました。私は、広域にわたる長期データをもとに空間明示モデルを使って分散率の推定をシカやコアジサシなどを対象に行うとともに、そのモデルを用いて具体的な管理策等の提言を行いました。今回は、その結果をお話します。

* セミナー終了後懇親会を予定しています。奮ってご参加ください。

TREE セミナーウェブページ : <http://wiki.livedoor.jp/treeseminar/>

T
R
E
E
19

T
R
E
E
20

12月27日(土)
16:00~17:00
V号館5207教室

「群集集合の歴史と生態系の機能： 木材腐朽菌を用いた実験」

深見理 Tadashi FUKAMI

Department of Biology, Stanford University

要旨

物質循環をはじめとした生態系の機能は、その変動の予測がむずかしい。最近、生態系にすむ生物の種数や種構成の影響が注目されてきた。しかし、種数や種構成自体も予測するのがむずかしく、その理由として「群集集合の歴史」(種の移入の順序)の影響が広く認識されつつある。群集の歴史が種数や種構成にとって重要なら、その影響を介して生態系の機能にも変化が生じるだろうか。この問いに答えるべく、ニュージーランドのナンキョクブナ林にみられる木材腐朽菌を対象としておこなった実験の結果を紹介する。この実験では、群集集合の歴史と栄養塩の濃度を操作し、菌類群集への影響だけでなく、炭素放出や分解など、生態系の機能への影響も調べた。その結果、群集集合の歴史によって、菌類種間に起きる相互作用が大きく異なり、生態系の機能にも変化が起きることが分かった。さらに、栄養塩濃度によって群集集合の歴史の影響が変わることも分かった。これらの結果は、生態系の機能を理解するには、群集集合の歴史を知る必要があることを示している。実験結果を詳しく紹介するとともに、群集集合と生態系の機能の関係について広く議論したい。

* セミナー終了後懇親会を予定しています。奮ってご参加ください。

TREE セミナーウェブページ : <http://wiki.livedoor.jp/treeseminar/>